

〈史料紹介〉

オスマン帝国の捕虜ハンガリー貴族 ワタイ・フェレンツの覚え書きと 彼の解放に関する 2 通の手紙

先 浜 和 美

初 め に

ワタイ・フェレンツ⁽¹⁾は主戦場をハンガリーとしたオスマン帝国とハプスブルク帝国の長期戦争⁽²⁾期の 1602 年のオスマン帝国によるセーケシュフェールヴァール⁽³⁾城塞攻撃の際、その城塞の副軍司令官として任務遂行中に捕虜とされ、1603 年にイスタンブルの悪名高い塔イエディクレ（7つの塔）に幽閉され、1606 年に解放された。彼は幽閉中の 1605 年自らの体験を覚え書きに著した。彼への身代金が高すぎたため彼の家族は彼を救いだすことが出来ず彼はイエディクレへ送られたが、ブダに連行された後 1606 年ベオグラードで解放されたという [Tardy 1997: 415]。新婚間も無く一人残された彼の妻ヴァーギイ・ジュジャンナが彼の元上司ナーダスディ・フェレンツの未亡人バートリ・エルジェバートへ夫の解放を助けてくれるように願いでる。それに応えて 1605 年 3 月 9 日にエリジェバートはハンガリー貴族バッチャーニー・フェレンツに宛ててワタイ・フェレンツ解放への尽力を依頼する手紙を書いている。また、1606 年 3 月 7 日にオスマン帝国ブダ州の行政長官アリ・パシャ⁽⁴⁾の首席補佐官アフメド・ケトフダがバッチャーニー・フェレンツに宛ててワタイ・フェレンツとハプスブルク側に捕らわれているトルコ人の捕虜交換を提案する手紙を書いている。

オスマン帝国スルタン・スレイマン 1 世（在位 1520–1566）は、1541 年にハンガリー大遠征を行いハンガリー中央部にオスマン帝国の直轄州ブダ州を設置した。これ以後約 150 年間、ハンガリーは三分割されることになる。ハンガリー北西部はハプスブルク領ハンガリー（ハンガリー王国）となりハンガリー東部を含むトランシルヴァニアはオスマン帝国の封国トランシルヴァニア公国となる。スレイマン 1 世は最後のハンガリー遠征途上没した。1568 年の和平条約エディルネ条約第 13 条に「和平条約締結後、身代金の交渉もなく捕虜となっている者、身代金を支払うことが出来ずに捕虜となっている者すべてを解放し、その属する所に還すこと。いかなる理由であっても捕虜を更に拘束したり市場に出したり殺したりすることは許されないこと」と定めている [先浜 2003 b: 143]。和平条約締結後オスマン帝国のハンガリー辺境の地は紛争や小競り合いが絶えなかった。身代金目当ての捕虜の捕獲が辺境のハンガリーにおいて頻発した。戦時であれ平時であれ捕虜となった者が奴隷市場に行くか身代金を支払う捕虜になるかは捕虜自身の出自や官位次第であった。この身代金は現金および高価な品物で賄われ、長期戦争の混乱期には両者

側にとって利益の上がるビジネスになっていた [Pálffy 2007 : 36–45]。

ハンガリーのオスマン史家フォドル・パールは、オスマン帝国の奴隷に関する研究分野にまだ注目されねばならない分野があり、それは戦時捕虜であり身代金奴隷に関する分野であると言及している [Fodor 2007 : xviii]。上記のワタイ・フェレンツの覚え書きと 2 通の手紙をそれぞれハンガリー語から翻訳し紹介することは僅かながらもそれに寄与することになると考える。

I. ワタイ・フェレンツの覚書⁽⁵⁾

テキストは、Wathay Ferenc *Önéletírásából*, in Tardy Lajos ed., *Rabok, Követek, Kalmárok, az Oszmán Birodalomról*, Budapest, 1977, pp.416–430 による⁽⁶⁾。

1602 年 7 月 11 日に私は可哀相にも我が妻を一人残して別れを告げねばならなかった。しかしその時はまだ聖ヤコブの日 (7 月 25 日) までには愛しい妻の元へ戻ることが出来るという望みがあった。あれから 31 ヶ月も過ぎてしまった。きっと妻は私の帰りをずっと待っていることだろう。私たちの結婚生活はわずか 5 ヶ月にしかすぎず、しかもその間のほとんどを私の任務や移動のために離れ離れで、実際に共に暮らしたのはたった 65 日にしか過ぎないのだ。

慈悲深い神は愛し合う二人にこのように早い別れと悲しみをお与えになった。主よ、主よ、主は本当にこの地上から不幸を無くそうとなされておいでなのですか。この私を少しも哀れみくださらないのですか。どうぞこの私をこのような不幸の身からお救いください。我が主なる神には、私が主に帰依し永久に神の僕であることがお分かりのはずです。どうぞ私に慈悲をお示しくだされて、我が愛しの妻に再び会わせくださいますように。アーメン。

私がセーケシュフェールヴァール⁽⁷⁾に赴いたのは、司令官の命令によってだ。それは私が勇んで敵と戦かおうという戦闘心に水を差した。城塞建設のために働く貧しい人々を指揮するためにそこへ派遣された。なぜなら司令官がセーケシュフェールヴァール城塞の補強を急いでいたためだ。そこへ私は 100 頭の馬と 100 人のドイツ人の歩兵と 50 人のハイドゥー⁽⁸⁾を引き連れて赴いた。レシェンツェとケストハイ⁽⁹⁾では難渋し、道中では多くの貧しく困窮している人々の嘆きを聞きつつ 150 人を引率していった。御した馬車の具合は良かった。私が 150 人の者とセーケシュフェールヴァールに到着するやいなやハサン・パシャ⁽¹⁰⁾がセーケシュフェールヴァール奪還にやって来るという知らせがとどいた。こんな事態に手を拱いてハサンを待っている訳にはいかなかった。この突然の知らせで誰もがここから去ることが出来なくなってしまった。今取り急ぎこれを書いている。パシャはすでにこの近くまで来ている。今日は 8 月 10 日。司令官に至急お願いします。兵隊たちに援軍を馬と家畜と一緒に派遣してください。

その次の次の日、今日は聖女カラーラの日 (8 月 12 日) です。ハサン・パシャがついにやって来て城塞を占領しようとしている。城塞内には 1000 人の自由ハイドゥーが駐留していた。彼らはコロニツ⁽¹¹⁾とロズブルム⁽¹²⁾によってこれ以前に強制的にここに連れられてきたのであろう。これに関して詳しく知りたいのであれば前に書いた『フェールヴァールの歌』を読めば良

く分かる。城塞攻撃が開始されてから7日目になると、ハイドゥーの中に逃亡する者が多く出てきた。彼らのある者は川の中州に繁茂している鬱蒼とした茂みに隠れ、またある者は教会の敷地内に逃げ込んだ。城塞に残っているハイドゥーはわずか9人になってしまった。その9人の中にハイドゥーの隊長がいた。それは若いヴァイダ⁽¹³⁾であって私たちと残留していた。初めて彼がハイドゥーの隊長であることを知ったその夜に彼は一人中州へと逃亡した。後の者は城塞内に閉じ込められてしまった。このことはトルコが城塞包囲攻撃を開始後28日目に起こった。ドイツ人はこのトルコの激しい包囲攻撃の最中に戦闘要員が尽きてしまったことを認めざるをえなかった。ここに城塞を持ちこたえることは決して出来ないことが明らかになった。ついにドイツ人は城塞を開城した。私は本当のことを書いている。ドイツ人はこの時ハンガリー人にも他の誰にも何も相談せずに城塞を明け渡したのだ。城塞内にはなお私を含めてハンガリー人やハイドゥーの兵士合わせて138人がなお残っていたにもかかわらず私たちに一言も言わずに事を行った⁽¹⁴⁾。

「聖ヤーノシュの首切りの日」の8月29日の朝が来た。この朝、捕虜となった者がぞろぞろとあちらこちらから集まってきた。そして、イエニチェリの軍が、開城合意がなったことによりおもむろに城塞内に入ってきた。この時は、私たちが城塞から逃れ出ることが出来るとは思ってもみなかった。イエニチェリは城塞に入るとすぐに慰安婦を追い駆けまわし始めたので、私は馬に乗り城門のほうへと向かおうとした丁度その時ドイツ人が恐怖の大声を上げた。イエニチェリの行動がその理由であった。イエニチェリが私の後方にいるドイツ人を殺し始めていたのだ。それで我勝ちにと一斉に皆は城門目指して走り出した。城門は込み合い身動きの取れない状態となった。私も馬上で身動きが取れなかった。私はその場で馬の足を高く何度も何度も蹴り上げたが、馬上にいることが出来なくなり馬から降りて歩き出した。私は美味しいワインいりの錫製の瓶を小袋に入れ馬の後ろにぶら下げておいた。私はとっさに思いついて大声を上げその瓶を高く掲げてからそれをイエニチェリ目掛けて投げ上げた。しかしその瓶では一人のパシヤも私を助けてくれる役には立たなかった。私はたちまち数百本の剣で取り囲まれてしまった。イエニチェリたちは剣で私を突付き始めた。私もすぐに自分も剣を持っていることに気づき剣で防戦した。神が私の死をお望みでなかったお陰で私はやっとのことでイエニチェリたちの手から逃れることができた。

私は3箇所も傷を負うことになってしまった。この時は両腕の肘の付け根に傷を負い以前にも左肩に傷を負っていた。私は人気のない人家の壁をよじ登った。この家は商家のようであった。この家の屋根に座り込み着ていたものを脱ぎ剣も脇に置いた。そして心から偉大な神に祈りを捧げた。もう私には命を永らえる望みが僅かしか残っていなかった。

イエニチェリの一団がついに私を探し出してしまった。彼らは恐ろしいことに簡単に人を切り殺すのだ。私は二人のイエニチェリに取り押さえられてしまった。ついに私が死ぬ時がやってきたのだと覚悟を決めた。しかしイエニチェリたちは私の着ているものを全て剥ぎ取り僅かに持っていた12フォリントを取り上げると急ごしらえの汚いテントへと私を連行した。そこで床屋が私の肩の傷を縫ってくれた。12針も縫った。

翌日、パシヤはこの陣内に捕らえておいた捕虜すべてを調べ始めた。私はイエニチェリ・ア

ガのテントに連れて行かれた。そのテントには既に私たちの総司令官やドイツ人の司令官の多くがいた。その場でトルコ人は総司令官と私を選び出してデフテルダルつまり財務官のところへ連れて行った。そのデフテルダル・パシャは私たちをブダ⁽¹⁵⁾経由でヴァーツ⁽¹⁶⁾へと移送すると私たちが期待を持つようなことを語った。

そして私たちはある夜そこから連れ出され馬車に載せられてブダを目指して出立した。9月1日にブダに到着した。到着したその夕方に城塞内にある有様の良さそうな一軒の仕立屋が宿舎としてあてがわれた。そこはまるで古代の王たちの堅牢で古い蔵のようであった。そこには僅かしか滞在せず12日目にはその店から連れ出された。そこにはその時私たちの仲間が20人いたが、全ての者がその足に鉄の足かせが嵌められていた。私はまだ傷が癒えていないのに一番大きな足枷が嵌められてしまった。この時、私たち皆は足枷を嵌められたまま別の場所の壊れかけた塔へ閉じ込められてしまった。しかしそこにも長くいず、ある夜遅く塔から連れ出された。この時は私を含めて24人であった。私たちは船に乗せられドナウ河を下り一路ベオグラード⁽¹⁷⁾へと運ばれていたのだ。このことに気がついたのはベオグラードへ着いたときであった。そこがヴァーツではなかったことにやっと気がついた。パシャが嘘をついていたのだ。私も他のドイツ人もお人よしであった。

「聖ミハイルの日(9月29日)」に私たちは城塞の地下牢に入れられた。食べ物や飲み物は十分に与えられた。10月14日に陣営からパシャ⁽¹⁸⁾がやって来た。パシャは総司令官と私を含めて10人を選び出しコンスタンチノーブルへと連れて行くことにした。それで私たちは運河沿いにあるキャラバンサライ⁽¹⁹⁾の牢へ入れられた。その牢にはパシャの捕虜が多く収容されていた。

その牢に入れられていた時に逃げる事が出来るかもしれないと微かな望みを持ったことがある。どのようなことかと言えば、両方に足枷が嵌められていたのだが、私はどうにかして片方の足枷を切り離した。しかも、もう片方の足枷が緩々の状態で簡単に足を引き抜くことが出来そうだった。しかし、信仰心のないアンソニイという名のドイツ人の裏切り者が牢番のワリアン・バッシュにそれを告げ口した。しかしその牢番は切り離した足枷を見ても私を鞭で打ったりはしなかった。神の御心が、牢番の犬のような心に私への哀れみの気持ちを抱かせたからであろう。しかも牢番は別の足枷を嵌めることはせずそのままにしてくれてくれた。私は牢番に詫びとして金貨4枚を差し出した。

時がどんどんと過ぎていくなかで私は家に一人残してきた可哀な妻を思い出して辛くなった。自由の身であった時を思い耐え切れなくなった時は神に祈った。このような環境で私は一人のハンガリーの若者と親しくなった。その若者はトルコ人によりイスラム教に改宗させられていた。彼は私にゆったりとしたトルコの上着つまりイエニチェリの上着と高帽子そしてだぶだぶのズボンと靴底の平たいブーツを持ってきてくれた。この時私はまたこのトルコの服を着て逃げ出す事が出来るかもしれないと考えた。牢番たちは牢を仕切っている格子の前で見張っているが、しばしば私たちが入れられているところの前で僅す酒飲み会にやって来る。私はその時が逃げる機会だと考えた。

私はまた逃げ出すために鉄の足枷を肉きりナイフでどうにかこうにか切り離して、自分の幸運

を試そうと準備してその時が来るのを待っていた。その好機は上天気の日によって来た。その朝何らかの用事のある捕虜は全て牢から連れ出されていた。牢番たちはそんな日はいつも明るい日差しの中で虱取りをするのが常だった。その日も虱取りをしていた。しかもワインで顔を赤くしていた。これを見た私はすぐさまトルコ服に急ぎ替えて足枷を外した。哀れな私の捕虜仲間が私の周りを覆い隠してくれた。1603年5月4日のことであった。私は牢を脱け出した。牢の格子もどうにか通り抜けることが出来たのだ。いつもだとそこには牢番やそれにお追従する捕虜がいるのだがその時は幸運にも誰もいなかった。

いと慈悲深き神は堅固に建てられているキャラバンサライの門へとお導き下った。門の両側には多くの店があり、店先にはいつもトルコ人の店主が座っていることが分かっていたので、私は門のほうには向かわず、サヴァ河の水を運ぶ人が通る門のほうへと向かって行った。この時も我が主なる神が私をお導きくださった。それを説明すると、私は、本当はドナウ河沿いに下って行ってその周辺にある城塞にしばらくの間隠れていようと思っていたのだが、神がもっと下流のほうへと私をお導きくださったのだ。ベオグラードからさらに離れた葡萄の木ぐらいいく生育しない高さの山に登った。すると、遠くの山の谷間からセルビア人が歌を唄いながらやってくるのが見えた。その日はセルビア人の暦で旧暦の復活祭の月曜日だった。私はすぐに身を隠すことが出来た。またも神が私をお救いくださった。

私はその日の午後に高い山に登った。そこはベオグラードからおよそ1マイルぐらい離れた所であったろう。ハンガリーの地形を知るためとドナウ河のどのあたりだったら渡ることが出来るかを知らうとしたのだ。夕闇が迫り暗くなる頃には私の持っていた布製の鞆は葡萄の蔓で一杯になっていた。私は大草原を目指そうと思っていたのでそこでの喉の渇きを癒すためには葡萄の蔓がきつと役に立つだろうと考えた。パンの塊3個も持っていた。小さな手斧も持っていたのでそれで木を切りオールをつくった。そして夜が更けてから船を捜しにドナウ河へ下っていった。ベオグラードへ通じる村の近くのドナウ河岸で運良く一艘の船を見つけ出すことができた。難渋してやっと船を繋いでいる鎖を切り離すことが出来た。その時近くにセルビア人が寝ていたのだが運良く気づかれずに船をドナウ河へと漕ぎ出すことが出来た。神のご加護に支えられて私はそこが昼間に考えていたまさにその場所だとすぐに気がついた。そこはテムシュ河とドナウ河の合流地点であった。

私はその夜のうちにトルコ人の城塞近くにあるパンチョヴァ村⁽²⁰⁾に着いた。そこから大草原の中にあるルゴシュとカラーンシェベシュ⁽²¹⁾方面へと進んでいった。3日間大草原の中を彷徨歩いた。喉が渇いて死にそうであった。葡萄の蔓は少しも役に立たなかった。大きな木で出来た広い柵に囲まれた建物のところに辿り着いた。人の気配はしなかった。大きな修道院の形をした教会だった。昔はこの教会にはおそらく二つの塔が建っていたと思われるが今は朽ち果てて一つが残っているだけだった。教会はなだらかな丘の上に建っていた。その夜はそこで過ごした。教会の墓地に生えているサンザシの茂みに身を横たえた。夜中に冷たい雨と強風が吹き寒さで凍え死にそうであった。私はイエニチュエリの上着をドナウ河の向こう岸に置き忘れてしまっていた。防寒にならないような上着しか着ていなかったのだ。

翌日、目を覚ますと上々の天気だった。草原には何も見えず城塞などは影も形もなく、人が通るような道も見当たらなかった。私は日の沈む方角へ歩き出した。信仰心がなく悪漢の捕虜仲間が、ベオグラードからルゴシュとカラーンシェベシュ間には森など何一つ無いと言っていたことを思い出したが、彼は嘘をついていたのだと思った。私は森の中奥深く入って行けば何処かの砦に辿り着けるだろうと考えた。私は人の歩いた跡を探しながら歩き続けた。疲労困憊の極みに達した5日目の夜、私はとある場所に辿り着いた。そこには塔が一つ立っていた。翌日、畑で働いているような人声が聞こえてきた。ゆっくりのその声のほうへ歩いて行った。その話している声を聞いて、てっきりハンガリー人が話しているのだと思い違いをしてしまった。その声の主は家畜に声をかけていたことが後になって分かった。

私はその人々のほうへ近づいて行った。この時、私はそこがカラーンシェベシュに違いないと考えていた。しかし、チャーク⁽²²⁾という砦であった。トランシルヴァニアの名家チャーク家はここ出身である。そこにいたのはチャーク家のヴォイヴォド⁽²³⁾に仕えているセルビア人であった。しかもその働いているセルビア人の傍らにはスバシ⁽²⁴⁾がいた。私はそれにすぐに気がついたが後の祭り、草原へと引き返す前にスバシは私を見つけてしまった。スバシはセルビア人に私を捕まえるように命じた。私は捕らえられてしまった。

私は砦へと連行され、ヴァイダに引き渡された。そのデルヴィーシュ⁽²⁵⁾のヴァイダは6日目に私をテメシュヴァール⁽²⁶⁾へと連行した。その時、ヴァイダは私に、テメシュヴァールにいる捕虜の中から私が私の身元を引き受けてくれる捕虜を探し出すことが出来てそして私が私の身代金を支払うことが出来るのであれば⁽²⁷⁾、私をリッパ⁽²⁸⁾へと釈放すると語った。しかし、これは嘘であることが分かった。私はテメシュヴァールに到着するとあるホージャ⁽²⁹⁾に引き渡された。なぜならこの時テメシュヴァールのパシャが不在であったためである。パシャはセーケイ人のモーゼシウ⁽³⁰⁾と一緒にトランシルヴァニアに滞在しているので許可なく釈放する訳にはいかないというのである。そのホージャはフェルハドという名であった。そのホージャが私に鉄の足かせを嵌めて牛小屋へ閉じ込めた。手枷も嵌められた。牛小屋の中で手枷足枷をつけられたまま私は横になっていた。このような状態のまま過ごし10日目にやっとのことで手枷から片方の手を抜くことが出来た。その夜半に私は手斧をベルトに差し込んで牛小屋の戸を静かに開けた。すると、戸の前にユスフという名のグヌルル⁽³¹⁾が寝ているではないか。ユスフはホージャの部下でその夜は月明かりのする明るい夜であったので注意深く見張りをするために戸の前に陣取っていたのだ。ユスフは、ベランダの自分の近くにある寝椅子にホージャが寝ていたので彼を起こさないように気遣いながらゆっくりと起き上がった。そして私の後ろから声を掛けた。「哀れなアンドラーシュよ！（私はここでアンドラーシュと名乗っていた⁽³²⁾）無駄骨だったな。自由の身になるのはまだ早い。自分の寝場所に戻って寝ることだな」。私は仕方なくこの言葉に従った。少し前に開けた戸をくぐり牛小屋に戻った。ユスフはこの夜一睡もせず私を見張っていた。

翌日、ホージャは狡猾な男ではあったが、私のしたことを寛大にも許してくれた。しかし、見張りは厳しくなった。1ヶ月も過ぎる頃私はまた逃亡の機会を窺うようになった。片方の手は手枷から抜くことが出来ることが分かっていたので、南京錠で寝台に固定されていた足と首をそこ

から外しそこに鎖を巻きつけてそれを隠しておいた。兎も角準備はしておいた。今度は牛小屋の壁に穴を開けそこから逃げ出そうとしたその時、マルコチ・アガが蠟燭を掲げて牛小屋に入ってきてしまった。ホージャにより与えられた権限によりマルコチは玉蜀黍の茎で作った鞭でワタイ・フェレンツではなくナジィ・アンドラーシュを何度も何度も打ち据えた。私の体の至るところからどろどろと止めどもなく血が流れ出た。私は気を失ってしまった。私は尻といわず頭も目や指までも体中を打たれてしまい、こんな体で生きていられるのは、私がかすかに手に握っている生きことを願う支え棒のお陰なのかもしれない。マルコチは私の意識が戻るとまた私を激しく打ち据えた。長い時間がそのようなことで過ぎていった。私は苦痛のために死んだりはしなかった。そして夜が更けていった。

このような状態の時、ベオグラード出身の一人のトルコ人が私に次のように教えてくれた。彼の話によると、私はパシヤの捕虜であるのでホージャは私を故郷に戻さないであろうということであった。これは本当のことであった。ホージャは私をテメシュヴァールの牢へと送り込んでしまった。その牢にただ一人バーンヘジェシュ・ヤーノシュとう名の兵士がいた。彼と意気投合し、彼と一緒に牢のベランダに接する壁をほじり、穴を開けた。この牢から誰一人の捕虜も逃亡に成功しなかったと言われている。逃亡は大仕事であった。7月10日の夜、私たち二人は牢から逃げ出すため壁の穴を潜り抜けた。するとベランダに二人が体を寄せ合い寝ているのが二組いるではないか。そこで私たちは反対側の窓から逃げることにした。毛布を切り裂きそれを繋ぎ合わせ5ウール⁽³³⁾ほどの長さの紐を石の城壁に垂らしそれに掛り静かに伝い下りた。今度は城壁の外側に廻らせてある防壁をよじ登らねばならなかった。私が防壁の上にたどり着いた丁度その時、見廻りのトルコ人がランプをかざしてやって来たのだ。私は万事休すの状態だった。前にも進めず後ろにも戻る事が出来なかった。私は牢に戻ろうとした。すぐ傍にトルコ人が来ている。私の心は涙であふれ出しそうだった。私は防壁の上に立っているのだ。とっさに私は防壁の上から飛び降りた。飛び降りた所は首まで丈のある草むらの中であった。そこから足を引きずって逃げ出した。まだ片方の足に鉄の鎖がついたままの足を引きずって歩かざるを得なかった。私は一直線に堀を目掛けて逃げた。堀の遠くのほうからセルビア人が私を探し回って大声を上げているのが聞こえた。私は後ろも振り返らずにただただ逃げた。堀を離れて今度は果樹園から果樹園へと逃げ回った。よろめいたり躓いては立ち上がったたりしながら私はとうとう草原に辿り着くことが出来た。そこはテメシュ川が湾曲している地点であったので周囲は川で囲まれていた。私はそこで追いかけてきたセルビア人に捕まえられてしまった。また私は万事休すの状態になってしまった。そこで片方の足に鎖が付いていることも省みず私は神のご加護のみを頼んで川に飛び込んだ。どうにか泳ぎきることが出来、私は生きながらえることが出来た。

私は逃げおおせることが出来たが、神は我が友であるヤーノシュが捕らえられることをお許しになった。私と離れていた時に捕まった。私の逃亡は苦しいものであった。逃亡3日目に私はフェムラク⁽³⁴⁾の草原にいた。私はリッパに行きたかった。リッパは雨が多く霧深い地方に位置しているため山々の形さえ見渡せないような土地なのだ。私は広々とした草原を貫く1本の道から程よく離れたところに身を横たえた。私は疲労困憊していたので泥のように眠りこけていた。丁

度その時その道をマンクツイ・アガという名のトルコ人が連れを従えてフェムラクへと歩を進めていた。私はそのことに少しも気が付かなかった。太陽が丁度真上に昇った正午頃のことであった。本当に間が悪いことが起きた。その時私の足を一匹の虫が刺したのだ。私はとっさに草むらに立ち上がってしまった。まさにその時トルコ人の一行が道をこちらへと近づいていた。私は見つかってしまった。トルコ人はすぐに私のところへ駆けつけ私を捉えた。私はフェムラクへと連行された。

しかし私が実際に連れて行かれたのはすでに知っている場所であった。私はテメシュヴァールへ連れ戻されたのだ。さらにそこからベオグラードへと連れ戻された。そしてまたあの気の滅入る牢へ入れられてしまった。それは8月4日のことであった。その牢では神があのとでも残酷で悪賢い老犬のような牢番に慈悲心を起こさせてくださったので私は鞭で打たれずに済んだ。しかし、私は片方の足に2本の鉄の鎖を掛けられてしまった。こんなことは初めてであった。こんな鎖が掛けられてはもう私はどうすることも出来なくなってしまった。さらに後になってさらに重い鎖を掛けられ苦しい日々を過ごした。その鎖の重さはハンガリーの重さで言えば優に30ポンドも超えるかと思われる代物で、それ以下でもそれ以上でもなかった。

このように苦しい日々の中、私は気がついたことがある。神に選ばれし者、神から試練を与えらし者、それは間違いなくこの私だということである。我が聖霊にして主なる神よ、我を見捨て給うことなかれ、わが身は悪魔の数多の毒矢に射られて苦しみの中で喘いでいるのですから。

そのような日々の中、ある日、チャヴシュ⁽³⁵⁾がハサン・パシャの手紙を携えてコンスタンチノーブルからベオグラードに到着した。その手紙に書かれていたことにより、ベオグラードに捕らえられているハサン・パシャの捕虜全て、すなわち高官の者を含め全ては1603年の「聖ミハイルの日」に馬車に乗せられた。6人が1台の馬車に乗せられた。全部で60台の馬車であった。馬車の中で6人は全て鎖で数珠繋ぎに繋がれた。手枷も掛けられ苦痛は想像を絶するものであった。このようにして私たちはコンスタンチノーブルへの苦しい馬車の旅を始めた。私は馬車の中で涙を堪えて後ろを振り返り振り返り我が祖国と愛しい可哀想な妻に別れを告げた。ベオグラードを出発して15日目にソフィアについた。私は足が痛くて耐えられなくなり哀願哀訴しさらに3タラールと金貨2枚を差し出すことで足に掛けられていた鎖を外してもらった。馬車はさらに先へ先へと進み30日目にコンスタンチノーブルに到着した。

私たちが旅の途上にある時、スルタン⁽³⁶⁾はハサン・パシャを処刑していた。そのため私たちは直接スルタンの宮廷へ連れて行かれた。そこでは私は捕虜の長のように扱われ、20人が1列となる列の1番前に並ばされた。私の列の捕虜はほとんどがベオグラードから連れてこられた者であった。10月最後の日に私は高位の者が幽閉されるあの忌まわしいイエディクレ⁽³⁷⁾に送られた。この塔で私は、仕立屋、床屋、ドイツ人の志願兵そしてハイドゥーと一緒にあった。

その時から私はずっと今もってこの塔に幽閉されている。私は数えることが出来ないほどの悲しみと苦悩の中で気晴らしのためと記録するためにこれを書いている。神の思し召しがあり、キリスト教世界でこの覚え書きを発表することが出来る時があるならば、これを読む人々はこの書から次のようなことを知ることになるであろう。我が主なる神が1600年から私に苦痛と試練を

お与えになったということ。愛し合う二人にその愛を確かめあう暇も与えずに離れ離れにしたということ、私が2度捕虜の身にされたこと、そして4度自由の身になったのにも拘らず想像も出来ないほどの不運に見舞われてしまい、ついに他の人々とここに囚われの身になっているということ。全てをこのように語ることは神の意に沿うことであろう。

私は聖なる神の御心のお陰で耐えることが出来ている。慈悲深き我が主なる神よ、どうか我が願いを叶えさせ給え。わが身を自由にさせ給え。我が愛する妻に見えさせ給え。

私ことワタイ・フェレンツが自ら1605年2月にイエディクレにてこれを記す。

II. パートリ・エルジェベート⁽³⁸⁾のバッチャーニィ・フェレンツ⁽³⁹⁾への手紙 (1605年3月9日)

テキストは、Magyar Országos Levéltár, Batthány Család Körmendi Levéltára, in Várkonyi Gábor, *Újabb Források Báthory Erzsébet Életéhez*, 1999, p.1314, <http://epa.aszk.hu/ik> による。

意気消沈しているワタイ・フェレンツ夫人は哀れな夫を捕虜の身分から解放するという望みを持って捕虜を一人買い取るということまでしました。しかし不幸な夫人の願いはいまだに叶えられていません。私は貴方様に心からお願いいたします。ワタイ・フェレンツとその捕虜の交換に何卒お力添えいただけますようお願いいたします。神は貴方様がそのような仕事に尽力するように望んでおられます。貴方様がその仕事をやり遂げることにより哀れなワタイ・フェレンツは自由の身になることが出来るのです。貴方さまの健やかなることを神に祈っております。哀れな捕囚の身になっている者を自由の身にしてあげることは神の意に沿うことであることをどうぞお考えくださいますように。

III. アフメド・ケトフダのバッチャーニィ・フェレンツへの手紙 (1606年3月7日)

テキストは、Gustav, Bayerle ed., *The Hungarian Letters of Ali Pasha of Buda 1604-1616*, Budapest, 1991, pp.38-39 による。

私は、偉大なトルコ皇帝の尊敬されるブダ州長官アリ・パシャ閣下のキハヤ（首席行政官）であります。

威厳のある勇士であり私どもの隣人である閣下へ私どもとの関係ある事柄全ての面において私どもは隣人としての節度と友情を捧げます。今日は件の事柄において閣下にこの印璽を押した公式の文書で御目文字せねばなりません。私はベオグラードで哀れなワタイ・フェレンツに会いました。その時、ワタイはコンスタンチノーブルへ再び連れ戻されようとしていた時期でした。彼は私に会うと、どうか悪いようにはしないでくれるように涙ながらに哀願し始めました。私は彼を本当に哀れに思いました。それで私は彼を私どもの哀れなゼルサルディ・アリ・ベイと交換することにしました。しかし、ワタイはいまだ私どもに留め置かれており、アリ・ベイも目下ジュ

ール⁽⁴⁰⁾に捕らわれています。私はワタイの釈放とアリ・ベイの釈放が同時に行われるものと理解しております。

神は、私が己の利のためにのみ働くことはなかったし今もそのようなことをしていないことをご存じです。さらに哀れな捕虜たちに慈悲を持って接してきたことを。閣下をお願いいたします、ワタイ・フェレンツのために閣下の親書をお書きくださいますように。私がワタイを連れていく道中に彼や私たち側の者がハンガリー人の兵やまた他の者たちから襲われることが決してないように親書をお書きください。ワタイを釈放するのでアリ・ベイも同じように釈放してください。私は閣下が神を信じておられるお方だと考えております。バッチャフィア⁽⁴¹⁾の友にどうぞ慈悲をお示しください。

閣下はその親書を閣下の部下の者に託してこちらへお送りください。その者は高位の者にしてください。またそちらからこちらへ派遣される者の中に私たちのアリ・ベイが含まれていることを願っております。私たちはこちらに遣って来る者たちはいかなる場所でも私たちの兵により危害が加えられることは決してないことを真に保証いたします。このようなやり方で一人の捕虜に対して一人の捕虜が釈放されることとなります。

取り急ぎ閣下に贈り物もお送りいたします。お気に召しますでしょうか。

閣下に神のご加護を。

終 わ り に

ワタイ・フェレンツは、バッチャーニー・フェレンツが所有していた捕虜と交換され解放されたと推測される。彼の身代金については知られていない。彼の解放は当時の捕虜解放の慣習とはいささか異なっていたのであろう。それは、当時のブダ州の行政長官アリ・パシヤもしくはアフメド・ケトフダとハンガリー貴族バッチャーニー・フェレンツの関係が作用していたと思われる。さらに、当時の戦況も作用したのであろう。トランシルヴァニアにおいて1605年に、ポチカイの反乱⁽⁴²⁾によりオスマン軍が重要な城塞エステルゴムを奪還し和平への動き⁽⁴³⁾が高まっていたことにもよるであろう。ワタイは1605年にイエディクレからバッチャーニー・フェレンツへ手紙を出している。捕虜交換を依頼する手紙であったのであろう。1606年11月11日にオスマン帝国とハプスブルク帝国は長期戦争終結の和平条約を締結した。恐らく、それ以前にワタイ・フェレンツは解放されたと思われる。

注

- (1) ハンガリー人の名前は姓・名の順である。1568年9月24日にハンガリー中流貴族の家に生まれ、1584年には早くもオスマン軍と戦い、長期戦争中に幾度も武勇の名をあげている。1601年のハプスブルク軍のセーケシュフェールヴァール城塞奪還戦に参戦した。詩歌も著している [Tardy 1977: 415]。
- (2) オスマン帝国はハプスブルク帝国と1568年にエディルネ和平条約を締結したが、1591年にボスニアの州知事がハプスブルク領内へ侵入するという事件を契機として、ハプスブルクに対し1593年7月3日に宣戦布告した。1606年11月11日にジトヴァトロク和平条約が締結された。15年戦争とも云

- う。[Finkel 1988 : 7-20]。
- (3) ブダの南西に位置する城塞で攻撃が困難な城塞。1543年にオスマン帝国により占領され、1601年にハプスブルク側に奪還された [Várdy 1997 : 656-57]。
 - (4) カディザーデ・アリ・パシヤ。ブダの首席裁判官の息子。1602年から1616年までに3度ブダの行政長官となる。ジトヴァトロク和平条約締結に尽力した [先浜 2003 a : 39-43]。
 - (5) 覚え書きの末尾に、ワタイ・フェレンツの雑記と題し、「スルタンに奉仕し俸給を得る者の名称とその人数」と「コンスタンチノーブルからベオグラードまでの行程と宿泊地名」がある [Tardy 1977 : 424-427] が、省略する。
 - (6) テキストの Tardy Lanos による注は【原注】と表記する。
 - (7) ハンガリー西部のトランスダニューブの中央部に位置する。1543年にオスマン帝国に占領される [Várdy 1997 : 656-657]。
 - (8) オスマン帝国による荒廃と領主の圧迫から逃れてきた流浪の農民集団であり、雇われて軍事奉仕をしたり食べるために略奪を行っていた [パムレーニイ 1980 : 187]。
 - (9) バラトン湖北西近くに位置する。
 - (10) 【原注】 イェミチ・ハサン・パシヤ。アルバニア出身。サライ（宮殿）で訓練され、1595-96年にイエニチェリ・アガ（オスマン帝国の常備歩兵軍団の司令官）で、1601年7月10日に大宰相となる。1601-02年のハンガリー遠征を指揮する。1603年にアナトリアのシパーヒーの反乱鎮圧のためコンスタンチノーブルへ帰還し、鎮圧成功後政敵の企てでその任を解かれ、1603年10月4日に処刑された。
 - (11) 【原注】 南スラブ出身のコロニツ家の者の多くはこの当時のハンガリー国において軍事的に重要な役割を担っていた。1601年のサーケシュフェヘルヴァール奪還を指揮したのはコロニツ・フェルディナンドであり、このとき城塞内の指揮をしていたのはコロニツ・ジグフリドである。
 - (12) 【原注】 ロズブルム・ヘルマン。1590年代にオスマン帝国への憎悪を露わにするハプスブルク皇帝軍の軍司令官の一人であった。
 - (13) ヴォイヴォド。軍事司令官の意。スラブ起源。トランシルヴァニア、モルダヴィアそしてワラキアにおいてルーマニア人が一般的に使用した語 [László 1992 : 3]。【原注】 フェルドヴァーリ・ヴィンツ。ヴォイヴォドたちは当初100人単位でハイドゥーを指揮していた。200人以上のハイドゥーが駐留する城塞において、ヴォイヴォドの長であり総軍司令官であった。
 - (14) ハンガリー貴族のハプスブルク帝国への不信が見て取れる。
 - (15) 現在のブダペストのドナウ川右岸の区域。1541年にオスマン帝国直轄州であるブダ州の州都となる。1872年にブダ、ペストとオーブダが合併しブダペストとなる [Várdy 1997 : 172-173]。
 - (16) ブダの北東に位置する。1545年オスマン帝国に占領される。1595年にハンガリー軍に奪還され、1620年再度オスマン帝国の支配下に入る [Hegyi 2000 : 163-172]。
 - (17) 1427年からハンガリー支配下に入る。1440年と1456年にオスマン軍により攻撃されるも撃退する。「キリスト教圏の外壁」と呼ばれた。1521年にオスマン帝国に占領される。ブダ州設置後も軍事的に重要な位置を占めた [Djurjew 1960 : 1163-65]。
 - (18) イェミチ・ハサン・パシヤ。
 - (19) 【原注】 キャラバンサライはほぼ正方形の形をしている。周囲が庭で囲まれていて、各々にバルコニーがある小部屋が幾つもある。洗濯をすることに最大の関心をもって建てられている。そのため川の傍でない場合は泉の近くに建てられている。
 - (20) 1552年にオスマン領となる。
 - (21) 1552年にオスマン領となるが、この時はトランシルヴァニア公国に属する [Hegyi 2000 : 164]。
 - (22) 【原注】 チャクヴァール。テメシュ地方の村。城塞の塔が現存する。
 - (23) 【原注】 オスマン帝国の行政単位サンジャクにおいても特別な働きをした。
 - (24) 【原注】 サンジャク・ベイ（長）の副官により任命され、サンジャク内の秩序に責任を持つ。
 - (25) 広義にはスーフィー教団の成員一般。狭義には住所不定の乞食僧 [濱田 2002 : 659]。

- (26) オスマン帝国とハプスブルク帝国との境界近くにあり、戦略上重要な地位を占めていた。1552年にオスマン帝国直轄州テメシュヴァール州が設置される [Dávid 2000: 417]。
- (27) 捕虜が自分の身代金調達のため一時的にその属する地に戻ることが両帝国間で認められた慣習であった。身代金調達に出かけた捕虜が戻ることを他の捕虜が保証人となって責任を負う [Sugar 1971: 82-91]。捕虜解放保証人の最初の史的文書は、1492年のハンガリー-南防衛線上にある3つの城塞に捕らわれていた21人のトルコ人に関するものである [Nógrád 2007: 27-34]。
- (28) 1552年からテメシュヴァール州のサンジャクとなり、1595年から1616年の間トランシルヴァニア公国領となる [Hegy 2000: 164-165]。
- (29) 本来、貴顕や紳士に対する敬称。オスマン帝国においては先生を意味する敬称 [濱田 2002: 890-891]。
- (30) 【原注】 セーケイ人の貴族でトランシルヴァニア公国の軍司令官。ハプスブルク帝国軍をトランシルヴァニアから追い出すために出かけた。
- (31) 【原注】 志願兵。イエニチェリに所属する。平時には城塞近くで生活する。
- (32) 身代金が高くないよう副軍司令官ではなく一兵卒と名乗ったのであろう。
- (33) ハンガリーの長さの単位。1ウールは183センチメートル。
- (34) 【原注】 テメシュ地方の村。リップパの近くに位置する。
- (35) 儀式係りや使者など多様な職務を担う [Bayerle 1997: 29]。
- (36) メフメド3世 (在位 1594-1603)。
- (37) 【原注】 コンスタンチノーブル城壁の南西の角にある。当初は5つ、後に7つの堡塁があった。ビザンチン時代に建設され財宝庫として使用された。この時期は牢獄とされていた。
- (38) トランシルヴァニアの君公バートリ・ガブリエル (在位 1608-1613) の叔母。ハンガリーの「ヴァンパイア伯爵夫人」として知られている。夫ナーダスディ・フェレンツは、1601年のセーケシュフェールヴァール奪還戦時の軍司令官でありワタイの上官 (1603年に病死) [Várdy 1997: 137]。
- (39) ブダ州の行政長官アリ・パシヤと親しく手紙をやり取りしたハンガリー貴族。1609年11月、アリはブダを離任することを知らせる彼への手紙の中で、「神がお許し下さるのであれば、私たちの間にある友情に相応しく私の結婚式に閣下を招待するのが当然でしょう」と書いている。[Bayerle 1991: 185], [先浜 2003 a: 52-53]。
- (40) ブダペストとウィーンの間位置する。オスマン帝国直轄州ブダ州設置後、オスマン帝国とハプスブルク帝国間の国境線上にあるキリスト教圏の重要な城塞の一つ。長期戦争中の1594年から1598年の間オスマン帝国の支配下に入る [Várdy 1997: 323]。
- (41) ハンガリー語の呼称。バーチはおじさん、フィアは息子で、おじさんの息子の意。
- (42) トランシルヴァニア君公バートリ・ジグモンドの叔父でその顧問官であったボチカイ・イシュトヴァーンが反ハプスブルクの反乱を1604年にオスマン帝国の支援のもとで起こす。ハプスブルク支配下のハンガリー貴族も援軍を送るようになった [先浜 2009: 50]。アリ・パシヤはボチカイの反乱時にハンガリー貴族達に宛てボチカイを支援するよう手紙を書いている。1605年9月5日のパッチャーニイ・フェレンツ宛ての手紙に、「昨年、我が皇帝陛下が、私を1万人の兵士と共にトランシルヴァニアの君公のところへ派遣されたことはご存じだと思います。私たちは一生懸命ドイツ人と戦いました。今、私はその地から戻り、3万人の人々と偉大な我が皇帝陛下の意に添って働いております。閣下は、何もしないという過ちを犯してはなりません」と書いている [Takáts 1928: 516-517]。
- (43) 1606年11月11日、ドナウ河に面したジトヴァのトロク (河口) においてオスマン帝国とハプスブルク帝国の和平条約が締結された。和平会議はボチカイ・イシュトヴァーンの代理人を仲介人として開催された。アリ・パシヤはオスマン帝国の代表者として、またパッチャーニイ・フェレンツはハプスブルク帝国の代表団を構成するハンガリー諸県の代表者の一人として参加した [Bayerle 1980: 5-18]。

参考文献

Bayerle, Gustav,

1980 : The Compromise at Zsitvatorok, in *Archivum Ottomanicum*, VI, Hague, pp.5–53.

1991 : *The Hungarian Letters of Ali Pasha of Buda 1604–1616*, Budapest.

1997 : *Pashas, Beks, and Effendis : A Historical Dictionary of Titles and Terms in the Ottoman Empire*, Istanbul.

Dávid, Géza,

2000 : Temeshwār, in *Encyclopaedia of Islam*, vol.x, Leiden, p.417.

Dávid, Géza and Fodor, Pál eds.,

2007 : *Ransom Slavery along the Ottoman Borders (Early Fifteenth – Early Eighteenth Centuries)*, Leiden, Boston.

Djurjew, B.,

1960 : Belgrade, in *Encyclopaedia of Islam*, vol.I, Leiden, pp.1163–65.

Finkel, Caroline,

1988 : *The Administration of Warfare : the Ottoman Military Campaigns in Hungary, 1593–1606*, Wien.

Fodor, Pál,

2007 : Introduction, in Dávid Géza and Fodor Pál eds., *Ransom Slavery along the Ottoman Borders (Early Fifteenth – Early Eighteenth Centuries)*, Liden, Boston, pp.xi–xx.

Hegyí, Klára,

2000 : Ottoman Network of Fortress in Hungary, in Dávid Géza and Fodor Pál eds., *Ottomans, Hungarians, and Habsburgs in Central Europe (The Military Confines in the Era of Ottoman Conquest)*, Liden, Boston, Köln, pp.163–194.

İnalçık, Halil,

1970 : The Heyday and Decline of the Ottoman Empire, in P. M. Holt ed., *The Cambridge History of Islam*, Vol.I, London, pp.324–353.

Kosáry, Dominic,

1971 : *A History of Hungary*, New York.

László, Kontler,

2002 : *A History of Hungary*, New York.

László, Péter,

1992 : *Historians and the History of Transylvania*, Columbia.

Makkai, László,

1982 : István Bocskai's Insurrectionary Army, in János M. Bak and Béla K. Király eds., *From Hunyadi to Rákóczi ; War and Society in Late Medieval and Early Modern Hungary*, New York, pp.275–296.

Nagy, László,

1982 : Erdély és Tizenötves Háború, in *Századok*, 116, 4 Szám, pp.639–688.

Nehring, Karl,

1986 : Magyarország és A Zsitvatoroki Szerződés (1605–1609), in *Századok*, 120, Budapest, pp.3–49.

Nógrády, Árpád,

2007 : A List of Ransom for Ottoman Captives imprisoned in Croatian Castles (1492), in Dávid Géza and Fodor Pál eds., *Ransom Slavery along the Ottoman Borders (Early Fifteenth – Early Eighteenth Centuries)*, Leiden, Boston, pp.27–34.

Pálffy, Géza,

2007 : Ransom Slavery along the Ottoman–Hungarian Frontier in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, in Dávid Géza and Fodor Pál eds., *Ransom Slavery along the Ottoman Borders (Early Fifteenth – Early*

- Eighteenth Centuries*), Leiden, Boston, pp.35–84.
- Shaw, Stanford, J.,
1976 : *History of the Ottoman Empire and Modern Turkey*, Vol.I, Cambridge.
- Sugar, Peter,
1971 : ‘The Ottoman Professional Prisoner’ on the Western Borders of the Empire in the 16th and 17th Centuries, in *Etudes Balkaniques*, 7.2, pp.82–91, Sofia.
- Sugar, Peter ed.,
1990 : *A History of Hungary*, Indiana.
- Szabad, Imre,
1884 : *Hungary – Past and Present*, Edinburgh.
- Szakály, Ferenc,
1990 : The Early Ottoman Period including Royal Hungary, in Sugar Peter ed., *A History of Hungary*, Indiana.
- Takáts, Sándor,
1928 : Kadezáde Ali Vezírbase, a Legnépszerűbb Budai Basa, in *Török Hódoltság Korából*, Budapest, pp.501–528.
- Tardy Lajos ed.,
1977 : *Rabok, Követek, Kalmárok, az Oszmán Birodalomról*, Budapest.
- Tóth, Sándor,
1981 : Török Stratégia a Tizenöt Éves Háborúban 1593–1606, in *Acta Historica*, LXIX, Szeged, pp.15–41.
- Újváry, Zsuzsanna,
1984 : *Nagy Két Császár Birodalmi Között*, Budapest.
- Várdy, Steven Béla,
1997 : *Historical Dictionary of Hungary*, London.
- Várkonyi, Gábor,
1999 : Magyar Országos Levéltár, Batthány Család Körmendi Levéltára, in *Újabb Források Báthory Erzsébet Életéhez*, p.1314, hhp : //epa.aszk/ik.
- Vaughan, Dorothy M.,
1954 : *Europe and the Turk – A Pattern of Alliances*, Liverpool.
- Wathay Ferenc,
1977 : Wathay Ferenc Önéletírásból, in Tardy Lajos ed., *Rabok, Követek, Kalmárok, az Oszmán Birodalomról*, Budapest, pp.416–430.
- 稲野 強,
1995 : ハブスブルク帝国とオスマン帝国, 歴史学研究会編, 『講座世界史2 近代世界への道——変容と摩擦』, 東京大学出版会, pp.43–74.
- 尾高 晋己,
1986 : ジトヴァトロク条約 (1606 年) について, 『愛知学院大学文学部紀要』, 15 号, pp.145 (20) – 123 (42).
- 先浜 和美,
2003 a : オスマン帝国辺境のブダのパシヤ——カディザーデ・アリ——, 『史泉』, pp.39–60.
2003 b : 1568 年エディルネ条約に至る平和交渉合意文書の試訳——ハンガリーを巡るオスマン帝国とハブスブルク帝国——, 『関西アラブ・イスラム研究』, 第 3 号, pp.129–150.
2009 : ジトヴァトロク条約とハンガリー貴族——オスマン帝国とハブスブルク帝国の 1606 年の和平条約——, 『関西アラブ・イスラム研究』, 第 7 号, pp.47–62.
- シュタットミュラー, ゲオルグ著, 矢田俊隆解題・丹後杏一訳,

- 1989：『ハプスブルク帝国史——中世から1918年まで』，刀水書房。
ツエルナー・エーリヒ著，リンツビヒラ裕美訳。
- 2000：『オーストリア史』，彩流社。
濱田 雅美，
- 2002：デルヴィーシュ，『岩波イスラーム辞典』，岩波書店，p.659。
- 2002：ホージャ，『岩波イスラーム辞典』，岩波書店，pp.890-91。
- バムレーニ・エルヴィン編，田代文雄・鹿島正裕共訳，
- 1980：『ハンガリー史 I』，恒文社。

(関西大学大学院研修生)